

LGBTQ+とナラティブ

LGBTQ+が当事者支援を行う意味

田中将司

Narrative of LGBTQ+ individuals' lives
: Meaning of supporting for LGBTQ+ people

TANAKA Masashi

1. はじめに

題目のとおり、私は「LGBTQ+」と「ナラティブ」をキーワードにして、これまで研究に取り組んできました。まずは、これらの言葉がキーワードになった理由を示します。

「LGBTQ+」をあげるようになった発端は、修士課程での初めての学会参加のとき、心理学分野で LGBTQ+の理解や支援について研究が行われていることを知ったところからでした。拙論で述べているとおり、私自身も LGBTQ+当事者で (e.g., 田中, 2024)、LGBTQ+に関する研究発表にそのとき強く興味を惹かれたことを覚えています。修士課程に在籍していた2015年当時は、現在に比べると LGBTQ+に関する研究発表は本邦で少なく、内容も偏っていたように思います。特に、LGBTQ+アイデンティティ発達に関する研究がほとんどで、いくつかの有名な発達モデルが提示され (Cass, 1979 ; McCarn & Fassinger, 1996 ; Troiden, 1988)、“概ね LGBTQ+はそのアイデンティティをこれらのモデルに沿って内在化する”という理解のもと、議論が重ねられていた印象がありました。あくまでそのときの印象なので、実際はどうであったかは、今振り返ると違う気もするのですが、当事者としての私は、それらの発達モデルや他の先生の見解に一定の理解を示しつつも、「何か気になる」感覚を抱くようになりました。

もう一つの研究キーワードである、「ナラティブ」との出会いは、同じく修士課程時代ですが、臨床心理士資格取得のための学びからでした。大学附属の心理教育相談室での相談業務がうまくいかず、なんとかしようと、たくさんの専門書を読み漁りました。その一つが、「物語としてのケア—ナラティブ・アプローチへの世界へ (野口, 2005)」でした。主観性、個別性を重視し、客観的現実を決してないという立場に立つ社会構成主義の考え方 (McNamee & Gergen, 1992 野口・野村訳 2014) と、その考え方に基づいた、ナラティブ・アプローチと呼ばれる臨床実践や研究は、上述の「何か気になる」を理解する手掛かりを得た感覚がありまし

た。その正体は恐らく、「自分の LGBTQ+としての人生を、あたかも理解しているかのように、抽象化して示されることへの不満や不安」だったのではないかと、思います。もちろん今は、理論モデルの生成や実証主義パラダイムの重要性を認識していますが、未熟ながら抱いてしまった不満や不安から、自分のためにも、「LGBTQ+」と「ナラティブ」を軸に学習をしようと積極的になったように記憶しています。また、その学習過程で、「LGBTQ+」と「ナラティブ」の両方をキーワードにした研究は、当時の本邦の心理学には少なかったことも知り、研究意欲も高まりました。以上が、私が「LGBTQ+」と「ナラティブ」を研究キーワードとした理由です。

以降は研究交流会報告として、まずは「LGBTQ+」と「ナラティブ」をキーワードとした私の研究概要を紹介し、次に、最近の研究課題と今後の展望を示します。おわりに、本発表のまとめと、これまでの研究をどのように授業に活用するかについて述べたいと思います。

2. 当事者支援を行う LGBTQ+のナラティブ

上述する Cass (1979) などのセクシュアルアイデンティティ発達モデルについて、一定の有用性がありつつも課題もあるという見解は、私の偏った考えではなく、他の研究者から既に指摘されていました。その一つに、「強み」視点の導入必要性がありました。ここでの「強み」は、「個人が適応的に人生を送ることを支えたり、自分自身や他者の人生がより充実することを助けたりする特徴や主観的経験、組織、制度」とします (Seligman & Csikszentmihalyi, 2000)。Vaughan & Rodriguez (2014) は、異性愛者や性別に違和を持たない者を健康の標準とする偏った理解から、LGBTQ+研究では近年までポジティブ心理学の枠組みに基づく言及がほとんどなかったことを指摘し、従来の LGBTQ+アイデンティティ発達モデルへも、「強み」視点の導入を提唱しました。

この「強み」視点から従来の研究を概観すると、他の当事者の擁護や支援をしようとする LGBTQ+の態度や行動 (以下、当事者支援) は過去の多くの研究ですでに捉えられてきたことを Vaughan et al. (2014) は述べました。近年は「強み」の中でも、「正義」というカテゴリーに当事者支援がまとめられ、その態度や行動が、LGBTQ+コミュニティへの帰属意識や、マイノリティへの擁護的態度、正義感をさらに強めるといわれてきました (Chan, 2022 ; Riggle, Mohr, Rostosky, & Fingerhut, 2014 ; Riggle & Rostosky, 2012 ; 田中, 2024 ; Vaughan, Miles, Parent, Lee, & Tilghman, 2014)。確かに、多くの研究が当事者支援を行う LGBTQ+を示しながらも、それほど強調されず、「強み」視点の導入でようやく捉えられるようになったと、私も文献レビューを通して感じました。

私の疑問は、「本当に“強み”として当事者支援を捉えることが LGBTQ+にとって有益か」にありました。自身の不満や不安から研究を始めた私自身も、ある種の当事者支援を行っている立場にいますが、「強み」という表現に漠然とした引っ掛かりを覚えました。さらに Dunn & Szymanski (2018)は、本来 LGBTQ+は、自身が受けた差別経験の対処として当事者支援を始めている場合が多く、差別経験からの回復の意味を当事者支援に求めている可能性があるこ

と、そのような自己志向的な意味はこれまで捉えられていないと、研究課題を述べていました。

私は、当事者支援を自己志向的側面からとらえると、ネガティブな経験であると考えていました。理由はいくつかの文献から推測可能ですが、LGBTQ+の「正義」は、その「強み」の中で唯一、自身の精神的健康にポジティブな影響を与えないことを示していた Riggle et al. (2014)の研究が一つにあげられます。そのため、LGBTQ+の当事者支援は、他者志向的な「強み」の枠組みを超えて、その複雑性や意味を探索する必要があると考えました。

当事者支援を行う LGBTQ+へのインタビューの逐語を対象ナラティブとし、当事者支援を行うまでのプロセスや経験の様相から、「強み」として言及されてきた当事者支援の自分自身にとっての意味を明らかにすることを目的とした研究を、いくつか実施しました。その研究結果と考察の一部（田中，2020，2023，2024）を本報告で示します。

50 代レズビアン のナラティブ（田中，2023，2024）

インタビューは何人かの当事者支援経験者に行いましたが、その一人に、LGBTQ+理解への啓発活動、支援活動に取り組む団体の代表であった 50 代レズビアン（A）がいました。概ね 1 時間半のインタビューを実施し、当事者支援を始めた理由について、以下のような語りを得ました。なお、本文中の「Int」とは、インタビューである筆者のことを指します。

A：社会人としての自立っていうこともある程度達成して、実績をむしろ積み重ねていき、で、そうやってこう取材、執筆活動とかをする中で自分のセクシュアルマイノリティに関わることでだけでなく、社会のいろんな課題を、こう手弁当で一生懸命やってる、名もない人たちの取材であったりとか、地域の課題であったりだとか、そういうのを取材して書く機会が多かったので、それをしていく中で、そういうことをしていることがいっぱい実はあったけど見えてなかったな、だけどそういうことがいっぱいあるんだな、ってことに気づいて、そういうことが積み重なって大きいきっかけになって、50 歳を前にした時に、ちょっと自分自身の人生を、50 歳ってやっぱ、振り返る頃なので、忘れてきた、人生の宿題をちょっと忘れてきたんじゃないか、っていう思いがふと、50 歳を前にした頃に、頭の中をよぎって、…なんか脇に置いて突っ走ってきたな一みたいなところがあって、私が何か社会とか地域とかそういったことに貢献できたり恩返しができたりだとか、何かできることとあって、自分が一番できることって、これだったんじゃないだろうか、っていう、いろんなことを取材してきていろんな課題があることは分かっているけど例えばセクシュアルマイノリティの人、の人権であったりだとか、差別されてきたりだとか、あの一、そういったことが見て見ないふりされてきたりだとか、っていう風なことに対して、それがこう自分に対して自分自身も見つめ、また社会のそういった、あり様みたいなものを見つめた時に、なんかできること、って、んー、そのことじゃないだろうか、って思って始めたのが、地元での、その一、（A が行う当事者支援

団体) っていうその、活動だったので。(田中, 2024, p.161)

Dunn& Szymanski (2018)が述べるように、確かに LGBTQ+に向けられた差別偏見に葛藤を感じ、その回復を求め、当事者支援を始めたと考えられました。では、実際の当事者支援はどうであったか、というと、以下のように A は語りました。

A : セクシュアルマイノリティ (LGBTQ+) の、自助啓発活動みたいなのが、自分のライフワークかな、と思いながらも、やっぱね、自分自身に向き合わなきゃいけないっていう、のが、それってね、いくつになってもしんどいよな。自分自身に向き合うっていうのは、できたら向き合いたくないっていうか、

Int : 今の発言っていうのは、A さん自身にとっての発言、思いなのか、それとも周りの人に対する思いなのか。…

A : あー。本当は自分自身にとっても周りの人にとってもって言いたいところだけど、まあ私はやっぱり今は、周りの人っていった意識の方が強いのかな。まあじゃあ、そこが私自分と向き合えてないっていうか、向き合うのがしんどいと、常に思っているところなのかな。すぐ社会とか人の問題にすり替えちゃうっていうか。…。

Int : なかなか自分の意識を向けてって、私も私でこれまで自分のためにやっているかどうか、わからないもんな。

A : うん。今本当に、相談も多くて、相談とかそれこそ今いろんなオファーがあって、それを一生懸命やっていると、それは確かに人のため世のため、って感じなんだけど、だけど、本当は、それだけじゃない、な、やっぱり、それをする事で、結局自分が救われてたりだとか、…お客さんのためとか、人のためとか、世のためとか言いながら、まあ結局、そうやって一生懸命やる事が、結局最終的に回り回って自分のため、まあ、自分のためだわな。(田中, 2024, p.162)

この語りから、A にとって当事者支援とは自己実現を目指して現在進行形に葛藤し、回復しようとするプロセスでもあったと考えられました。「強み」だけではとらえきれない側面を持ちあわせているように思われます。また、インタビュー中 A は、当事者支援を担っている共通性を持った Int の質問に、総じて真摯に向き合ってくれていました。上記語りからも、不躰な Int の質問から内省し、丁寧に回答してくれたことがうかがえます。A と Int の共通性と A のこの真摯な態度が、当事者支援に葛藤の側面がある語りを生成したようにも思われました。

70 代ゲイ男性のナラティブ (田中, 2020, 2023)

もう一人、HIV・エイズ相談と LGBTQ+相談に携わっていた 70 代ゲイ男性 (C) がいました。概ね 2 時間のインタビューを実施し、当事者支援を始めた理由について、以下のような語りを得ました。

Int : エイズボランティアを始めたのは流行だったから始めたみたいな感じだったんですか。

C: いやいやいやいや、それはね、言わなくちゃいけないね。ちょうど40、厄年の頃。41。その頃にね、恐怖を感じたんですよ、感染したんじゃないとか。あの頃エイズパニックで（ゲイの差別偏見が）ちょうど騒がれ始めた頃だから。もうこれでおしまいだと思った。まあね、ああ騒がれ出したからでしょ。まあこれでしばらく身を慎まないとやばいってね、もうちょっとしばらくおとなしくしておこう、って思って猫を飼い始めたんですよ。…それでね、もうエイズボランティアの方にいったのかな。要するにほら、もうそれがもう、切っても切り離せないようなものだから。エイズの、恐怖を打ち勝たないことには僕はほら、付き合えないわけですよ、誰にもね。怖くて。そりゃ人間と、付き合いたいと思うときはエイズが頭にあるからもう。なんか、セルフヘルプの意味でやっぱり、もうそのエイズの活動と、関わろうと思ったんですよ。（田中，2023，p.76）

この語りから、Cも差別偏見への葛藤と回復を理由に当事者支援に携わったと考えられました。では、実際の当事者支援はどうであったか、というと、以下のようにCは語りました。

C: だけどさっき言ったようになんかなんていうんだろうね。なんかあんまりその、キャリアが、ないから、経験がないでしょ、そんなに。もうエイズのボランティアとしてだけど、あの、陽性者の人と、あの、話はそんなに僕は、うまく話せないのかな、とか、相談相手にはなれないのかな、とか、思ったりしますよね。その例えば、陽性でもないわけでしょ。陽性でもないし、そんなにしょっちゅうハッテン場に、やっぱり（行っていないし）、高年ですよ、要するに。信ぴょう性のあるアドバイスは、できない、ですよ。ある程度のその知識であれ、得られたあれはほら、言えるけど。だから、もうあれですよ徹底された（LGBTQ+支援の）活動したり、リーダーをされてる、あの人たちに比べると僕なんか本当（相談相手にはなれない）。専門的な例えば保健師さんとか、まあ専門的なほら、あの医療の従事者の方はそれ相応の知識があるでしょ。僕なんか全然専門職じゃないし。全然でしょ。考えたら。自分の仕事みたいな感じだから、おこがましいでしょ。

Int: おこがましい。どうなんだろう、

C: だから、だからだから、その一、あれもちょこっと僕参加したけど。（エイズに限定しない）セクマイ（支援）の方。だから考えたら、僕もそんなに真剣に、どこまで考えてたのかな、って思ってね。例えばトランスジェンダーの人のをそんなに、勉強してないしと思いつつ、自信がなかったんですけど。（田中，2023，p.77）

この語りから、Cにとって当事者支援とは自己志向的にも他者志向的にも強みとは実感されず、自分の未熟さ、『おこがましさ』を知る経験であったと考えられました。また、背景に自身のキャリアや、HIV 陰性、トランスジェンダーではない当事者性の希薄さなど、様々な背景があることも話してくれたように思います。さらには、Cの『いわなくちゃいけないね』や『だ

からだから』などの言葉から、Int に理解してもらえよう、C は積極的にインタビューに関わってくれていたようにみえます。C の時代背景とその経験を今を生きる Int に積極的に伝えようとし、言葉を繰り返し考えてくれたからこそ、強みとは実感されない側面も正直に語ってくれたように考えられました。

2 人のナラティブに基づく私見—「強み」を超える理解と私へのメッセージ—

2 人のナラティブからいえる重要なことは、当事者支援を「強み」と捉えるリスクだと思います。ここでの私見はポジティブ心理学、ストレングス視点への批判ではありません。Seligman & Csikszentmihalyi (2000) のネガティブな経験重視の心理学分野への批判は、確かに理解でき、重要と考えます。問題は、あらゆる経験、組織、制度を「強み」として説明されたとき、過度な単純化が生じ、多元的側面、複雑な背景に目を向けられなくなってしまうことにあります。拙論（田中，2020，2023，2024）から具体的に述べると、確かに A の語りからは当事者支援を「強み」ととらえ、他者にポジティブな影響を与えている様相がうかがえました。一方、当事者支援を LGBTQ+ の「強み」と研究分野で定められたことで、A のような葛藤と回復のプロセス、C のような自分の未熟さ、『おこがましさ』を知る側面はいつの間にか見落とし、潜在化し、語りづらくさせる、美化させる、苦悩の表出を抑えてしまう可能性もあったと考えられます。インタビューで初めて葛藤していることに気づいた A の語りの様子は、そのことを示唆しているように思われました。当事者支援がイコール「強み」ではなく、一側面で「強み」であり、「強み」を超えた理解を示して研究を発展させることで、当事者支援を行う LGBTQ+ の心理的理解をより深められるのではないのでしょうか。

また、A や C が語ったこの「強み」を超えた意味は、単純に当事者支援と因果関係にないことも示されました。年代や時代背景、キャリアなど、さまざまな経験が複雑に関わっており、とりわけ、私とのインタビューであった影響は大きかったように思われました。今、当事者支援を行う私との対話故に、A や C は、真摯的に、積極的に参加してくれてこれらの語りが生成されたように考えられました。A や C からの私へのメッセージであり、このメッセージは残していかなければならないと、研究に向き合う姿勢をより高めてもらえたように思います。

3. 研究課題と展望

研究課題と展望は、主に 2 点考えています。以下、それぞれの概要をまとめます。

社会的変容を受けた当事者支援の語り直し

近年の LGBTQ+ に関する社会制度の変容は急速であります。LGBT 理解増進法の制定や地方自治体でのパートナーシップ宣誓の制度化、同性カップルの養育里親、アジア初の台湾での同性婚の法整備、同性婚を認めないことへの違法判決など、LGBTQ+ に大きく影響を与えるトピックは 5 年以内でも多くあげられます。差別やヘイトに関する報道も、多くなってきたように私は思います。これらのことが LGBTQ+ の生活や精神的健康にどのような影響を与える

かについての研究は重要であるでしょう。

この社会的変容の影響を調査する方法はいくつも考えられますが、これまでの関心や研究から、当事者支援を行う A や C などに、再度インタビューを行うことを展望としています。当事者支援を行う LGBTQ+こそ、この社会的変容を支える最前線に立っており、大きな影響を受けている可能性があります。当事者支援をどのように語り直すか探索することで、ここまでの社会的変容の意義に一考察を行えると考えています。

未成年の LGBTQ+を対象にした質的研究での手続き

当事者支援の観点から共通して述べられる見解もあったことは上に述べた通りですが、もう一つ、比較的誰からも共通して得られた考察がありました。それは、思春期、青年期時期までの経験、葛藤が、その後の人生に強く影響を与えていることでした。本報告で示した A や C も、思春期、青年期時期の経験が、その後の人生や当事者支援に影響を与えていたことを語っています（田中，2020，2022，2024）。そのため、LGBTQ+の子ども、若者の心理学的理解、支援に関する研究の蓄積は求められると考えていました。しかしながら、未成年の LGBTQ+対象の研究を行う場合には、保護者の研究同意を得るという一般的な倫理的手続きと、研究対象者が保護者に性的指向をカミングアウトしなければならないというリスクの間で葛藤が生じます。私自身、研究に協力的で積極的意欲を示す未成年の LGBTQ+に出会ったことがありますが、断念した経験がありました。実際、未成年の LGBTQ+を対象にした研究が研究倫理審査を通過できなかったケースは存在しています（e.g., Miller, Forte, Wilson, & Greene, 2006）。ニーズはあるが、研究ができないという状況は一つの課題であると考えられます。

今後は、未成年の LGBTQ+を対象にした質的研究での手続きを探索することが一つの展望です。現在までに、未成年の LGBTQ+を対象にした研究でどのような手続きが行われているかレビューを行ってきました（田中，2022）。一つの見解に、保護者の同意の代替として、「1）保護者以外の権利擁護者の許可を得ること、2）同意形成能力を評価し、本人の同意を有効とみなすこと、3）独立したサポート体制を提供すること」、の3つの手続きをとることがあると明らかになりましたが、10歳未満の LGBTQ+を対象にした研究のレビューがないことや、レビューの系統性に課題がありました。今後は的確な方法論を用いて先行研究の比較検討を繰り返すことを課題としています。

4. おわりに

ここまで、私のこれまでの研究と研究課題、展望について述べてきました。当事者支援を行う LGBTQ+のナラティブ研究を実施し、LGBTQ+にとって当事者支援とは、他者を支援する「強み」であるが、同時に自らが受けてきた差別偏見からの回復を目指すために当事者支援を始めているため、ときに葛藤や、ネガティブな側面もちうる経験にもなることが考えられました。今後は同じ LGBTQ+当事者にインタビューを再度行うことや、未成年の LGBTQ+に研究するための方法論の検討を行いたいと考えています。以下、自らの研究を、どのように授業

に活用するかについて、2 点にまとめます。

LGBTQ+の正しい理解を発信すること

まずは、自身の研究を含む、これまでの LGBTQ+対象の研究成果を丁寧に発信することが重要かと思います。現在の学生に話をしても、直接的で前時代的なヘイトが、感想として返ってくるのが少なくないです。そのため、“活用”と呼べることではないかもしれませんが、正しい理解を発信し、ヘイトに丁寧に向き合うことを大事にしたいと私は思っています。

真摯で積極的な態度で授業に臨むこと

研究課題や、教育者、研究者としての未熟さ、これまでの自分では気づくことができないことは必ずあり、それを意識しながら授業に臨むことは重要だと思います。そのような自分の間違い、過ちにすぐに気づけるよう、AやCの私への向き合い方を授業に参照し、真摯で積極的な態度で授業に臨むことも大事にしていきたいと考えています。具体的には、Aのように、学生からの質問に丁寧に向き合うことや、Cのように、自分のメッセージが届くように一生懸命、学生にことばを伝え続けることを、常に心がけていきたいです。

引用文献

- Cass, V. C. (1979). Homosexual identity formation: A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, 4, 219–235. http://doi.org/10.1300/J082v04n03_01
- Chan, R. C. H. (2022). Effects of minority stress on group identification and collective action among sexual minorities: A longitudinal test of the rejection-identification model. *Sex Roles*, 87, 237–250. <https://doi.org/10.1007/s11199-022-01304-2>
- Dunn, T. L. & Szymanski, D. M. (2018). Heterosexist discrimination and LGBTQ activism: Examining a moderated mediation model. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 5, 13–24. <https://doi.org/10.1037/sgd0000250>
- McCarn, S. R., & Fassinger, R. E. (1996). Revisioning sexual minority identity formation: A new model of lesbian identity and its implications for counseling and research. *The Counseling Psychologist*, 24, 508–543. <https://doi.org/10.1177/0011000096243011>
- McNamee, S. & Gergen, K. J. (1992). *Therapy as Social Construction*. Sage Publications Ltd. (野口裕二・野村直樹 (訳) (2014). ナラティブ・セラピー 社会構成主義の実践. 遠見書房)
- Miller, R.L., Forte, D., Wilson, B.D., & Greene, G.J. (2006). Protecting sexual minority youth from research risk: Conflicting perspectives. *American Journal of Community Psychology*, 37, 341–348. <https://doi.org/10.1007/s10464-006-9053-4>
- 野口裕二 (2005). 物語としてのケア—ナラティブ・アプローチへの世界へ. 医学書院.
- Riggle, E. D., Mohr, J. J., Rostosky, S. S., & Fingerhut A. W. (2014). A multifactor lesbian, gay, and bisexual positive identity measure (LGB-PIM). *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 1(4), 398–411. <https://doi.org/10.1037/sgd0000057>

- Riggle, E. D. & Rostosky, S. S. (2012). Mentors, role models, and activists. In Riggle, E. D. & Rostosky, S. S. (Eds.), *A Positive View of LGBTQ: Embracing Identity and Cultivating Well-Being* (pp. 109-126). Rowman & Littlefield Publishers.
- Seligman, M. E. P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, 55, 5-14. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.55.1.5>
- 田中将司 (2020). 70 代ゲイ男性のナラティブと時代背景. カウンセリング研究, 53, 39-51. https://doi.org/10.11544/cou.53.1_39
- 田中将司 (2022). 未成年の LGBT を対象にした研究倫理に関するレビュー-保護者の同意に代わる倫理的配慮-. 臨床心理学, 22(6), 759-769.
- 田中将司 (2023). レズビアン, ゲイ, バイセクシュアルの当事者支援活動と強みに着目したナラティブ研究. 九州大学博士学位論文 (甲第 16356 号).
- 田中将司 (2024). LGBTQ+当事者支援の「強み」を超える自分自身にとっての意味-1 人のレズビアンのナラティブに基づく考察-. 人間性心理学研究, 41(2), 157-167.
- Troiden, S. S. (1989). The formation of homosexual identities. *Journal of Homosexuality*, 17, 43-73. https://doi.org/10.1300/J082v17n01_02
- Vaughan, M. D., Miles, J., Parent, M. C., Lee, H. S., Tilghman, J. D., & Prokhorets, S. P. (2014). A content analysis of LGBT-themed positive psychology articles. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 1(4), 313-324. <https://doi.org/10.1037/sgd0000060>
- Vaughan, M. D., & Rodriguez, E. M. (2014). LGBT strengths: Incorporating positive psychology into theory, research, training, and practice. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, 1(4), 325-334. <https://doi.org/10.1037/sgd0000053>